THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS
日刊建設工業新聞
令和３年９月27日（月曜日）

足立参院議員

# 未経験地域の被害懸念

## 8月豪雨被災地 長崎、島根、青森を視察

8月に全国で相次いだ豪雨災害の被災地を視察した足立敏之参院議員が建設専門紙の取材に応じ、気候変動の影響で想定降雨量が少ない地域でも甚大な被害が続いていることに警鐘を鳴らした。早急に対応するには「流域治水の概念を取り入れ、多様な手法を選択できるようにする必要がある」との考えを示した上で、「当面対策と長期対策を組み合わせ対応していくしかない」と訴えた。

足立氏は今月初旬から中旬にかけ長崎、島根、青森各県を訪問。長崎県では雲仙市の土石流発生地などを視察した。応急復旧に対応している建設会社によると、腰までつかる柔らかい泥土に重機を入れ、泥土に混じった巨石を砕きながら作業に当たり早期の道路開放につなげたという。

島根県では松江市の地滑り現場や雲南市の内水氾濫現場などを見て回り、浸水被害が何度も起きている江の川流域で進む防災集団移転地の整備状況を確認した。

台風9号から変わった温帯低気圧の影響で既往最大の2倍超の降雨量を記録した青森県の下北地方も訪れた。むつ市では土砂崩れで国道279号に架かる小赤橋が落ち、近隣住民が孤立。同橋を管理する青森県の要望を受け、国の権限代行で仮橋を着工から3日間で設置した。現地では宮下宗一郎市長や県関係者、地元建設会社と意見交換した。

足立氏は「地球温暖化の影響で降雨量が増加し、これまで経験していないことが起きている」と指摘。台風も前例がないコースで通過することが多く、河川の計画降雨量が小さい地域でも豪雨発生が懸念されている。足立氏は各河川で整備基本方針・整備計画の見直しを進めることに加え、流域治水の考え方でさまざまな手立てを講じる必要性を強調した。

落橋した青森県むつ市の小赤橋（青森県提供）

意見交換する宮下むつ市長（右から2人目）と足立氏（同4人目）